関係フレームスキル（RFS）アセスメントシートの開発とその試行について

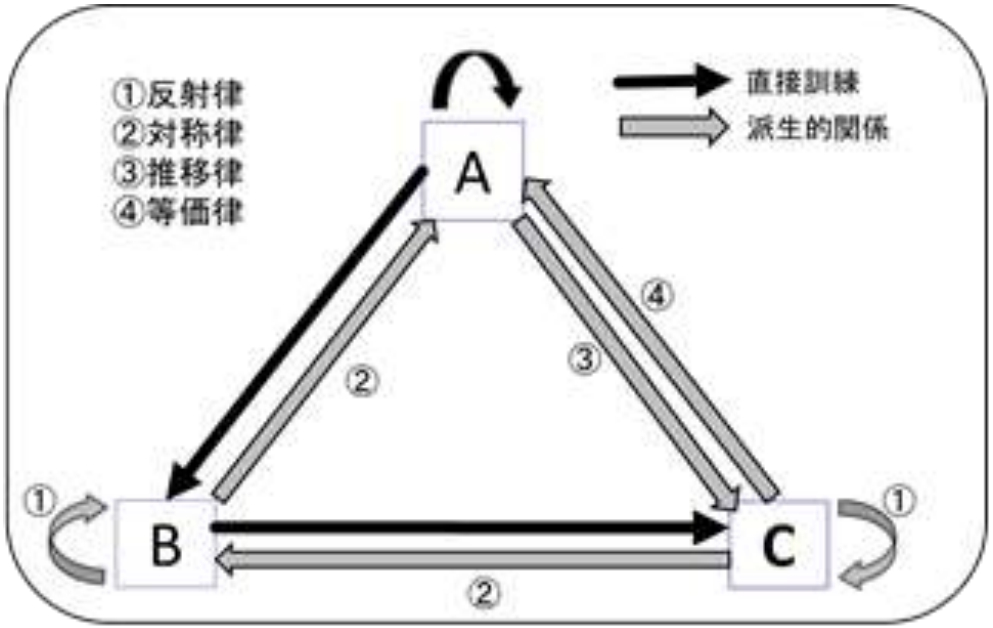
〇岩村　賢（株式会社スタートラインCBSヒューマンサポート研究所　研究員）
刎田　文記（株式会社スタートラインCBSヒューマンサポート研究所）

文脈的行動科学（CBS）と関係フレーム理論（RFT）

- 文脈的行動科学（CBS）のアプローチは、個体におけるその時点での文脈に対する標的行動を恣意的に設定し、その予測と制御を目指す立場をとる機能的文脈主義に依拠している。そして昨今、CBSにおける根幹理論としての関係フレーム理論（RFT）が注目されている。
- RFTとは、ヘイズが体系化した人間の言語や認知のような高次な行動に対して、予測と制御を目的とした場合に有用な行動原理を体系化した理論であり、シドマンの刺激等価性研究に端を発している。

刺激等価性（Stimulus Equivalence）

- シドマンが数学における等価関係の概念を借用して、提唱した
- 主に象徴的見本合わせ課題の訓練後に新しい見本合わせ課題への転移テストを行う形で研究されている



関係フレーム理論（RFT）

- 刺激等価性の枠組みにより研究が進んでいく中で等価の関係のみでは説明できないことや等価以外の関係においてもこのような派生的関係が成立しうることが発見されてきた。

- 関係フレーム理論では、等位の関係に限らず、ある機能的な刺激クラスのまとまりを一つの枠組み（フレーム）として捉える。また、言語や認知の中核的な特徴は派生的刺激関係と刺激機能の変換と捉えており、これを関係フレームづけと呼ぶ。関係フレームの関係性は関係フレームファミリーとも呼ばれ、主に9つに分類される。

RFTに基づく教育プログラム：海外での実践研究例

【RaiseYourIQ】

RaiseYourIQとは、関係フレーム理論に基づいた知的能力や職場、日常の意思決定と問題解決能力の向上を目的として開発されたプログラムである。暗記や数処理など直接的な訓練を行うことなく、知的な能力の向上を目指すことやオンラインで体験することが可能であるなど極めて独自性が高い。

【PEAK、PCA（PEAK Comprehensive assesment）】

PEAK Relational Training Systemは、自閉症児の言語および認知障害に対処するための評価手段として開発されたトレーニングパッケージである。PEAKにはD（Direct Training）、G（Generalization）、E（Equivalence）、T（Transformation）の４つの包括的なトレーニングモジュールによって構成されている。DとGは、随伴性に基づいた言語は発達の枠組みに、EとTは、刺激等価性と関係フレーム理論に基づいた言語開発へのアプローチにそれぞれ重きを置いている。また、PEAKを実施するに際し、４つあるモジュールのそれぞれどの段階から実施するべきかアセスメントを行うためのPCAと呼ばれるアセスメントツールも同様に開発されている。

研究の目的

【問題点】

主に教育場面において、関係フレーム理論の有効性が明らかになってきており、関係フレームスキル（RFS）を測定するための海外の研究がいくつか行われているが、日本におけるツールは開発されていない。

【目的】

職業リハビリテーション分野でも活用できるRFSアセスメントシートの開発し、その有効性を確かめる

方法

【RFSアセスメントシートの作成】

- RaiseYourIQやPCAなどの評価ツールを参考に、等位、区別、比較、反対、階層、時間、空間、視点取得の８つの関係フレームファミリーに関する設問項目を設けたRFSアセスメントシートを作成した。
- RFSアセスメントシートでは８つのRFSそれぞれに６つの設問を作成した。６つの設問は簡単なものから段階的に難しいものへとなるように構成されていた。

【RFSアセスメントシートの試行】

- **参加者**

一般企業で働く成人103人（男50女53）。研究同意済み。

- **試行手続き**

自記式の調査紙として行った。研究実施者が1問ずつ調査紙に記載された問題文を読み上げた後、続けて選択肢をそれぞれ口頭で読み上げ、その後「３つの中から一つ選んでください」と教示するという方式で行った。設問の読み上げを行ってから、次の設問の読み上げを始めるまでの時間間隔を１分として行い、全体としての実施時間は約50分程度であった。その後実施者が回答を読み上げて回答者がそれに従って採点を行い、採点完了後にアセスメントシートと同意書を回収した。

結果

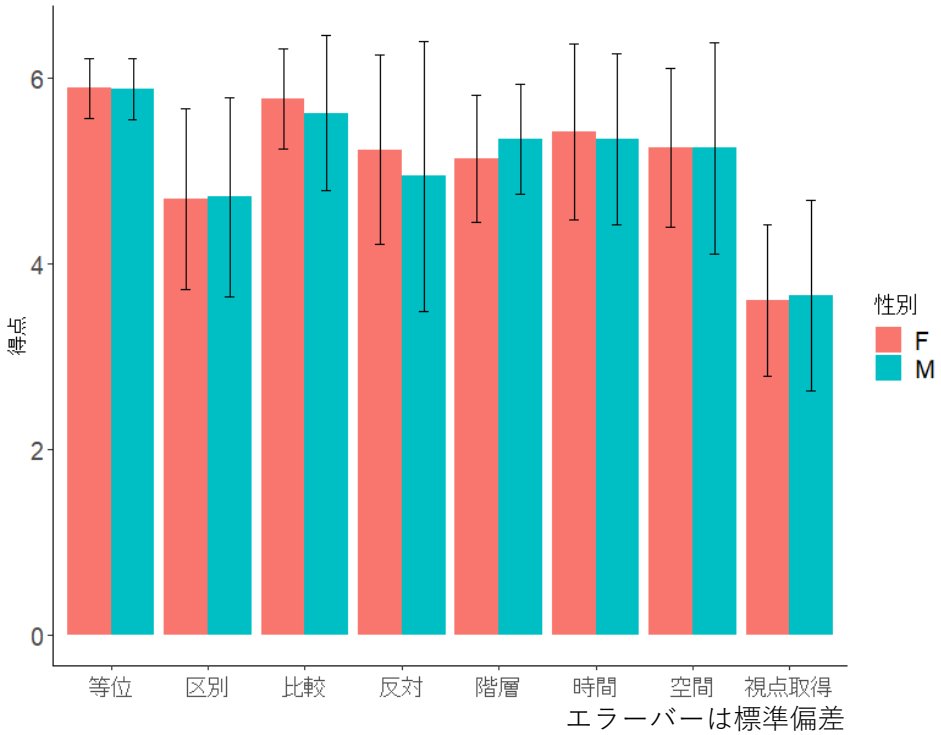


図１　RFSアセスメントシートの全参加者の得点の平均

- RFSアセスメントシートの全参加者の男女別平均を図1に示した。結果等位のRFFが最も高く、視点取得の関係フレームファミリーが男女ともに最も低かった。

- 関係フレームファミリーと性別の二要因分散分析を行った。交互主効果は有意ではなく、性別の単純主効果は見られず、RFFの単純主効果が見られた。

結果

表1　多重比較による群間差

	P値		P値
等位＞区別	p＜0.01	比較＞階層	p＜0.01
等位≒比較	n.s.	比較≒時間	n.s.
等位＞反対	p＜0.01	比較＞空間	p＜0.01
等位＞階層	p＜0.01	比較＞視点取得	p＜0.01
等位＞時間	p＜0.01	反対≒階層	n.s.
等位＞空間	p＜0.01	反対≒時間	n.s.
等位＞視点取得	p＜0.01	反対≒空間	n.s.
区別＜比較	p＜0.01	反対＞視点取得	p＜0.01
区別＜反対	p＜0.05	階層≒時間	n.s.
区別＜階層	p＜0.01	階層≒空間	n.s.
区別＜時間	p＜0.01	階層＞視点取得	p＜0.01
区別＜空間	p＜0.01	時間≒空間	n.s.
区別＞視点取得	p＜0.01	時間＞視点取得	p＜0.01
比較＞反対	p＜0.01	空間＞視点取得	p＜0.01

単純主効果が見られた関係フレームファミリーに関してtukey法による多重比較を行った。等位は比較を除き他関係フレームファミリーに比べて有意に高く、視点取得は他関係フレームファミリーに比べて有意に低かった。また、区別は反対と視点取得を除き、他関係フレームファミリーに比べて1％水準で有意に低かった。

今後の展望

- 本研究は開発したRFSアセスメントシートを用いて一般企業で働く成人におけるRFSの一般的傾向を確認することが出来た。

- 本研究における結果をもとにRFSアセスメントシートの設問内容を検討した結果、区別の関係フレームファミリーの設問に等位の関係フレームファミリーが複合していることが示唆された。この部分に関しては改善を図るとともに今後は関係フレームファミリーが複合した設問に関しても作成を検討したい。

- その他、今回の結果は区別の関係フレームファミリーは、非恣意的な関係フレームファミリーであるが、恣意的で難易度が高いとされる階層、時間、空間の関係フレームファミリーよりも優位に低いことが確認された。これが今回の対象者の傾向なのか上記のRFSアセスメントシートの設問の問題なのか判断できないのでアセスメントシートの内容を精査するほか対象者を増やして傾向を確認していきたい。